

図書館報

第90号

平成25(2013)年10月29日(火)

鳥取県立八頭高等学校図書館

思い出の図書館に再会

副校長 尾室 真郷

真っ青な青空に入道雲が映える時期になると、ふと高校時代の一コマが記憶に蘇る。



高校生の頃の私には、図書館で本を読むという習慣はなかった。文系でありながら情けないことに、元来、本を読むことがほとんどなく、かといってそれまでも読むのは推理小説程度であり、横溝正史を読んでは夜が更けるのを惜しんだ位であった。よって、高校の図書館で本を借りて読んだ記憶無し。図書室通った記憶無し。恐ろしいことに高校の図書館が何処にあったのかさえも定かでない。今から思えば本当に淋しい経験であり、情けないことである。

こんな私にも実は思い出の図書館がある。—今の時代、公立図書館において受験勉強は御法度なのだが—高校三年生の夏休みともなると、家で勉強する集中力のない私は鳥取県立図書館(現わらべ館)

で、同級生五、六人とともに受験勉強に毎日励んでいた。ところが、日曜日になると休館で行くことが出来ない。でも家では勉強する気が起きない。そんな時、誰が見つけてきたのか覚えていないが、郡家に公民館があり、その図書館は日曜日にも開館しているらしいと来た。おまけにテニスコート付き。朝から汽車で向かい、昼食後には一時間のテニス休憩、夕刻には帰宅する。わずかひと月、通った回数も四、五回であったが、私の心には、いつまでも美しくこの図書館は残っていた。

八頭高へ赴任し、三十五年の時を経て、その図書館を訪れたいと思った。行ってみるともう既に図書室は移設されて、公民館だけになっていたが、大鳥居を抜けて出会ったあの夏の郡家公民館は今も山の麓の特別な場所であった。



話を読書に戻そう。青春時代の行動は宝である。若いころに興味を持ったことは、何歳になってもまたやってみたいという思いに駆られるものだ。興味関心は継続するものである。四〇歳になっても五〇、六〇歳になってもまたやってみようかということになる。その一つに読書がある。学生時代に本を読むと世界が広がる。私自身の後悔はみなさんに味わってほしいくない。



実際、読書には様々な効果がある。六分の読書で、音楽や散歩より高いストレス解消効果があることも研究で明らかになっている。読書では六十八%、一方音楽六十一%、散歩四十二%の解消効果だそう。当たり前であるが、本を読んで想像することで、大脳は想像したことを実際に経験した時のように活性化するのである。それが喜びに繋がっているのである。不思議な話だが、テレビやゲームでは同様な現象は起きないらしい。さらに、読書を通じ、他者の感情を体験することで、相手の感情が予測できるようになりコミュニケーション力がアップすること

も分かっている。この読書経験はいつでも出来そうなものだが、学生時代にしないとなると、絶対にもったいない。

また、読書や図書館が新しい世界をひらく出会いの場でもある。八頭高の図書館で、メダカの本を紹介され、不覚にも今年の夏に嵌ってしまった。たかがメダカと侮っていたが、読んでいくうちにメダカの美しさに魅せられ、本気になってしまい飼ってみたくになった。「楊貴妃」「琥珀」「さくら」「プラチナ」と言う名にも憧れ、場所もない私の家の軒先に火鉢・水連鉢を並べ、育ててみた。毎朝、餌をやるだけの関係なのに、いつまでも眺めている今の私がいる。おかげで愛犬がメダカに嫉妬している。これも図書館のせいである。八頭高図書館に恩返しをしたく、我が家で育てたメダカを秋には図書館でも泳がせたいと思う。何かと出会うのが楽しみな場所となった図書館。次は何と出会うのだろうか。

